

被災者による復興のモノサシ

—阪神・淡路大震災 生活復興調査—

同志社大学社会学部教授

立木 茂雄

目次

- 災害過程とは？
- 生活を再建するとは？
- 人と人とのつながりのチカラとは？

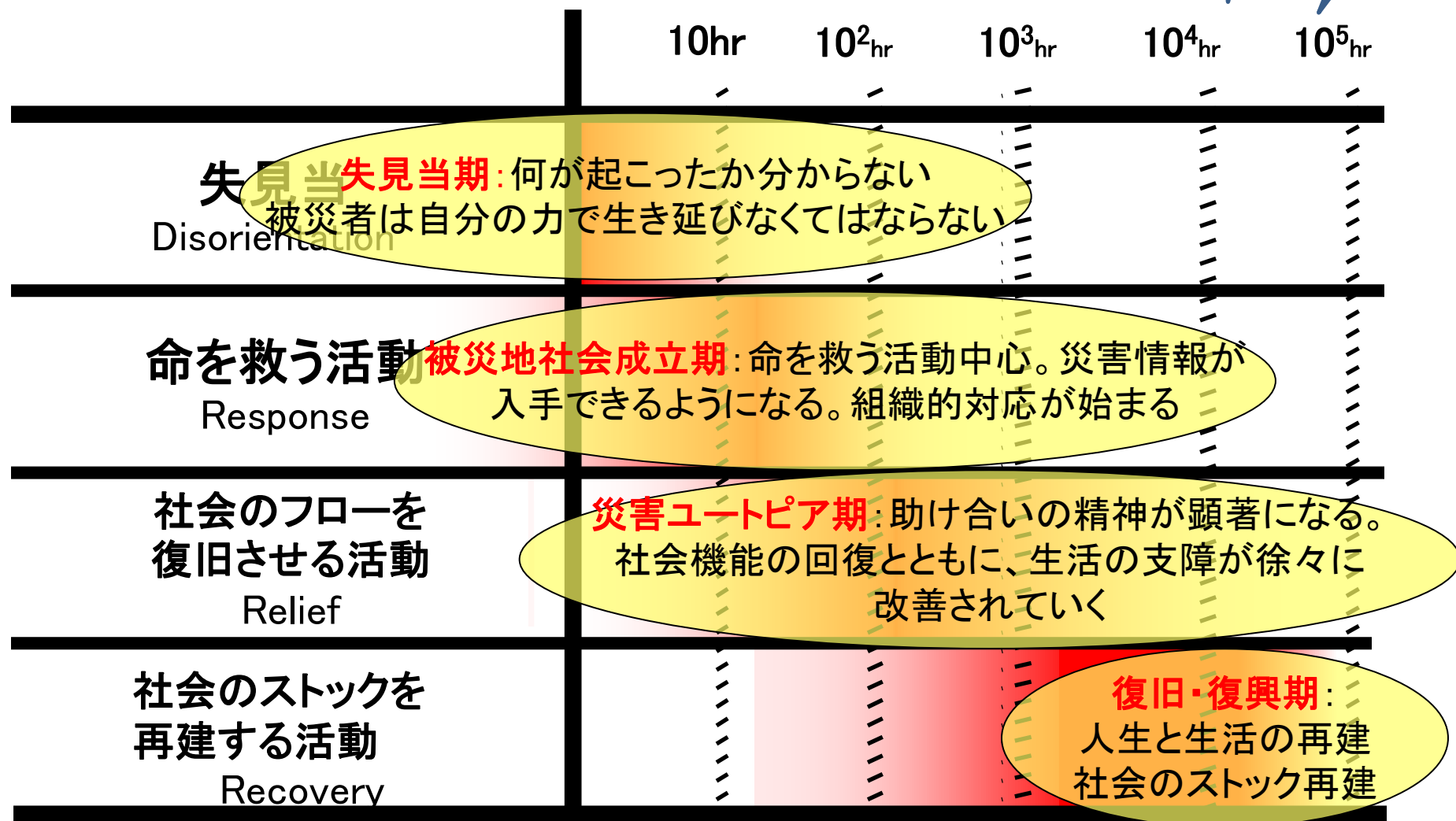
災害過程について知る

10, 100, 1000...の時間区分

被災者の心理的時間区分

1年

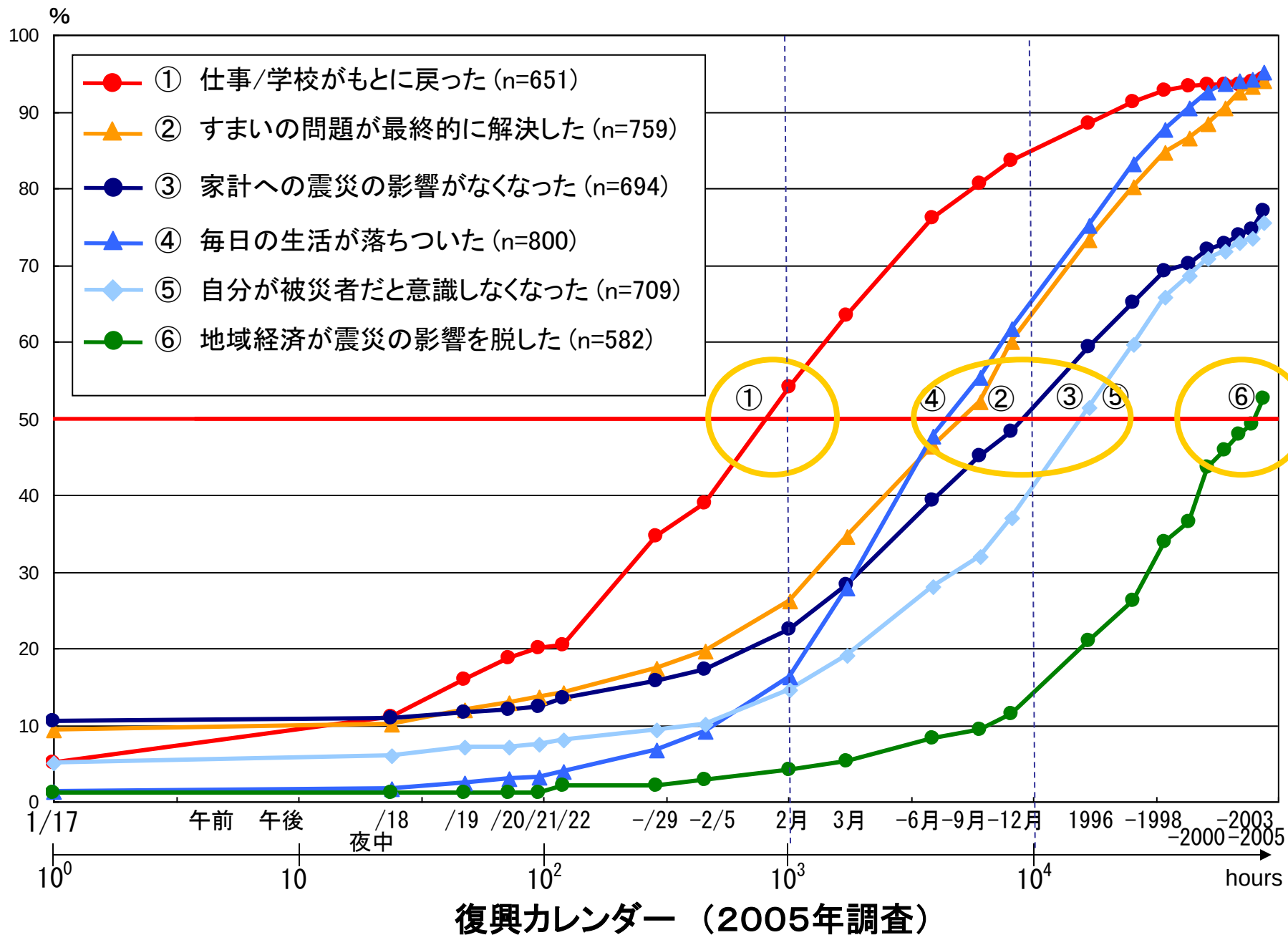
11年



復興カレンダー

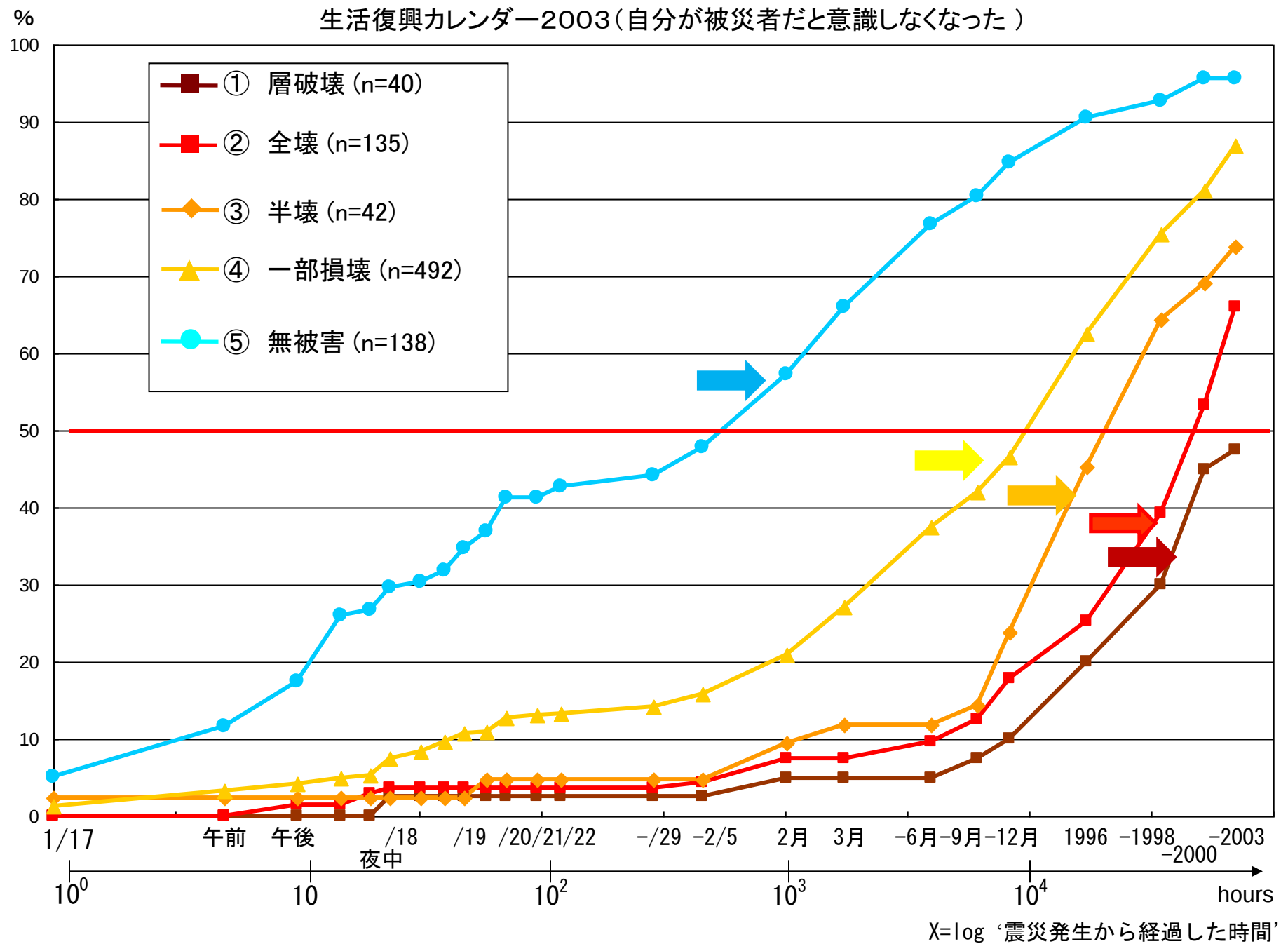
- 以下のことが震災後いつ起きたのかを尋ねる
- 時間を対数軸でとる(心理的な時間の流れ)

-  仕事/学校がもとに戻った (n=651)
-  すまいの問題が最終的に解決した (n=759)
-  家計への震災の影響がなくなった (n=694)
-  毎日の生活が落ち着いた (n=800)
-  自分が被災者だと意識しなくなった (n=709)
-  地域経済が震災の影響を脱した (n=582)



復興カレンダー
(自分が被災者だと
意識しなくなった)

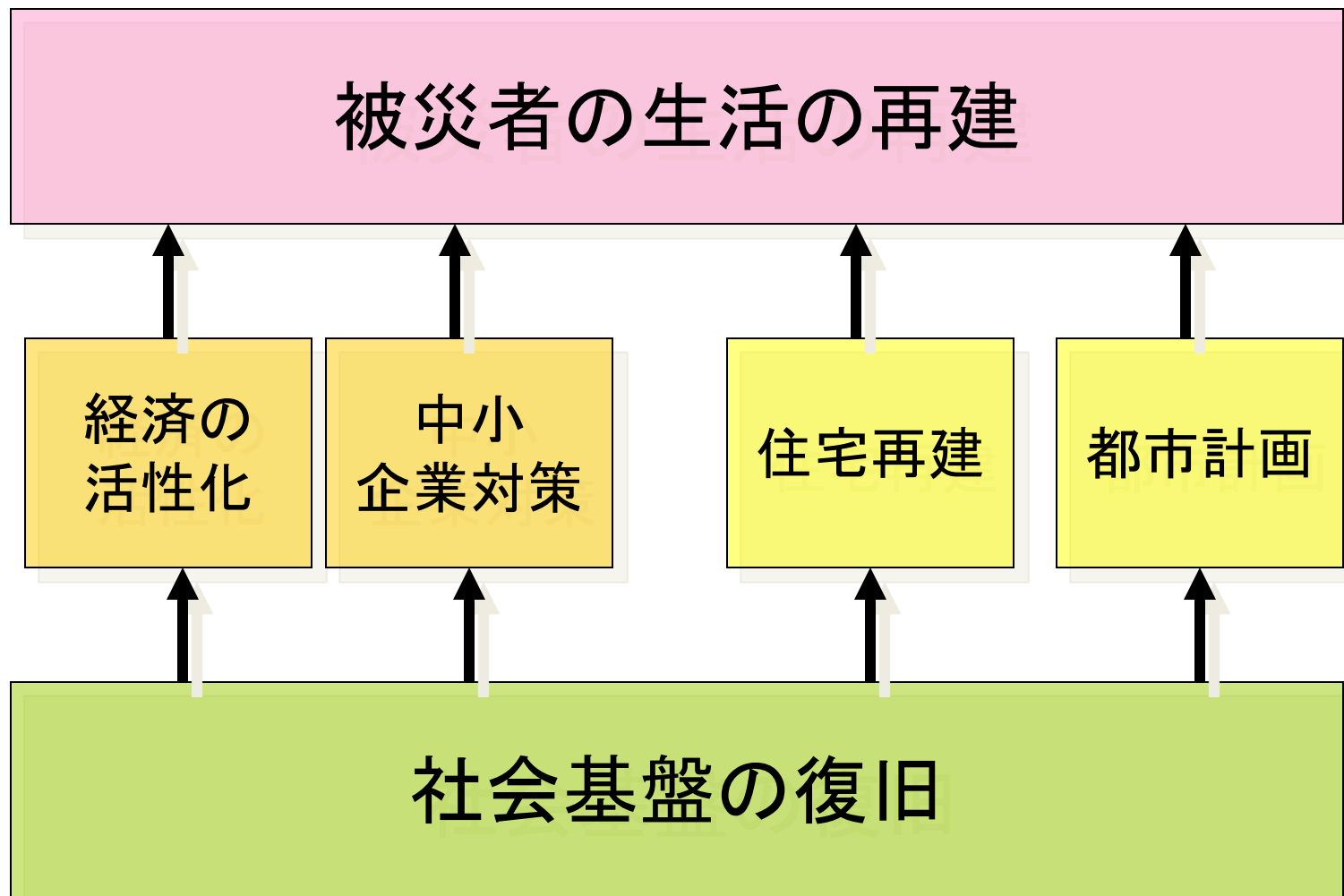
生活復興カレンダー2003(自分が被災者だと意識しなくなった)



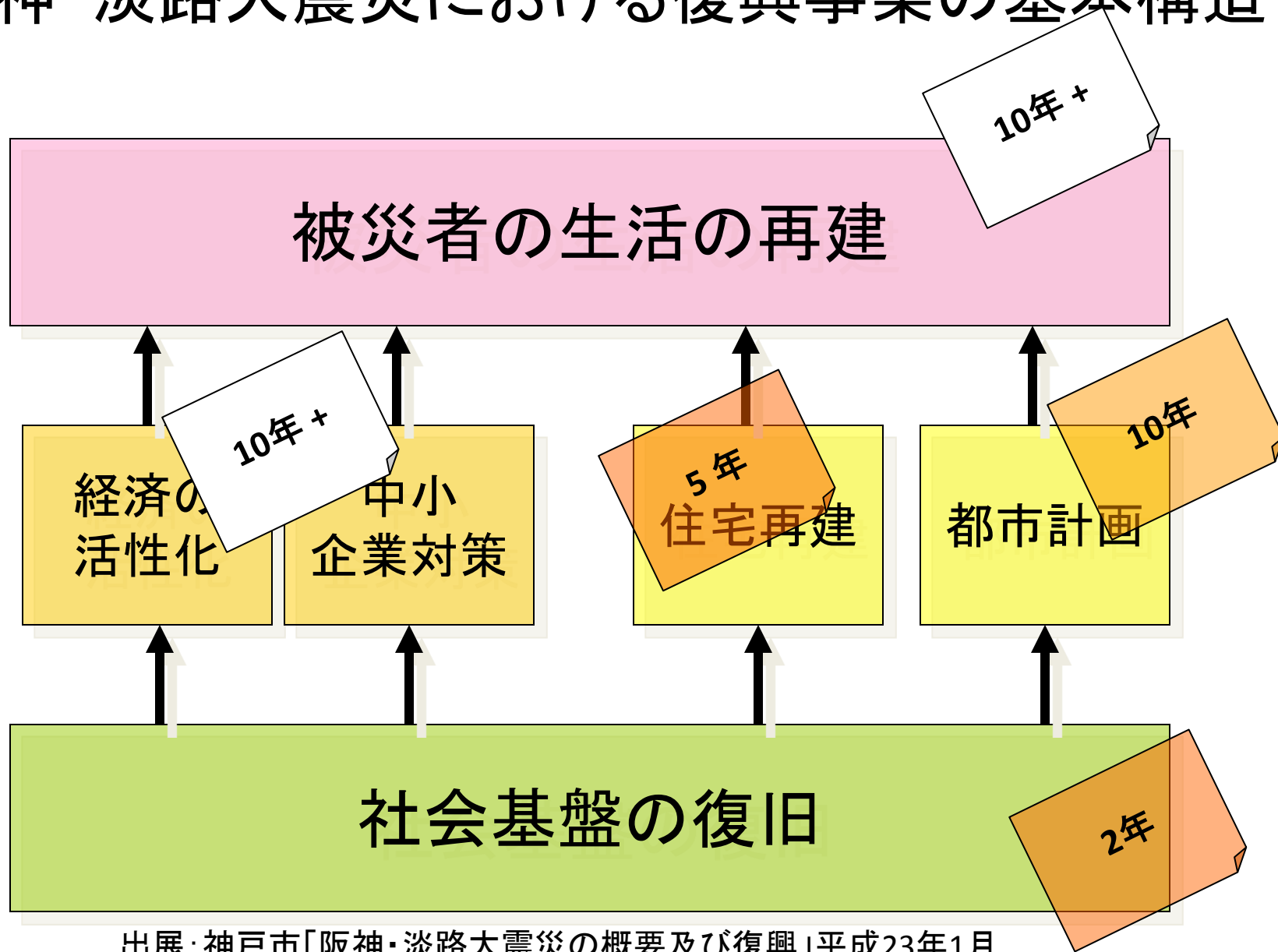
復興カレンダーの心理的な時間の 流れを規定する要因

復興事業の基本構造

阪神・淡路大震災における復興事業の基本構造



阪神・淡路大震災における復興事業の基本構造



生活を再建するとは どういうことか？

生活を立て直すための7つの要素



1999年神戸市生活再建草の根検証検討会 (神戸市震災5年検証)



立木茂雄・林春男「TQM法による市民の生活再建の総括検証一草の根検証と生活再建の鳥瞰図づくり」『都市政策』104、2001、123-141.



市民の生活再建実感

(神戸市草の根検証ワークショップ結果、99年7月～9月)

①すまい

住宅被害

様々な
仮住まい先

すまいあって
の生活再建

⑤そなえ

個人でそなえるよ
うになったこと

地域でのそな
えには課題が

今後への提言

②つながり

自分が支援され
る立場になった

つながりから
理解・共感が
生まれた

新しいつながり
が生まれた

自律と連帯が
つながりの鍵

⑥景気・生業・ くらしむき

景気の落ち込み、
地域経済の停滞

個人の生業への
影響

くらしむきは戻
ったが、余裕は
ない

③まち

まちの全般的復
興はまだまだ

ハード先行の
復興。でもソ
フト面は？

活かしたい花・
緑・文化・そなえ

④こころとからだ

からだの治療は
終わったが...

心の傷は今でも

心のケアは
今でも必要

対処資源の
利用

被災体験を意味
づけたい

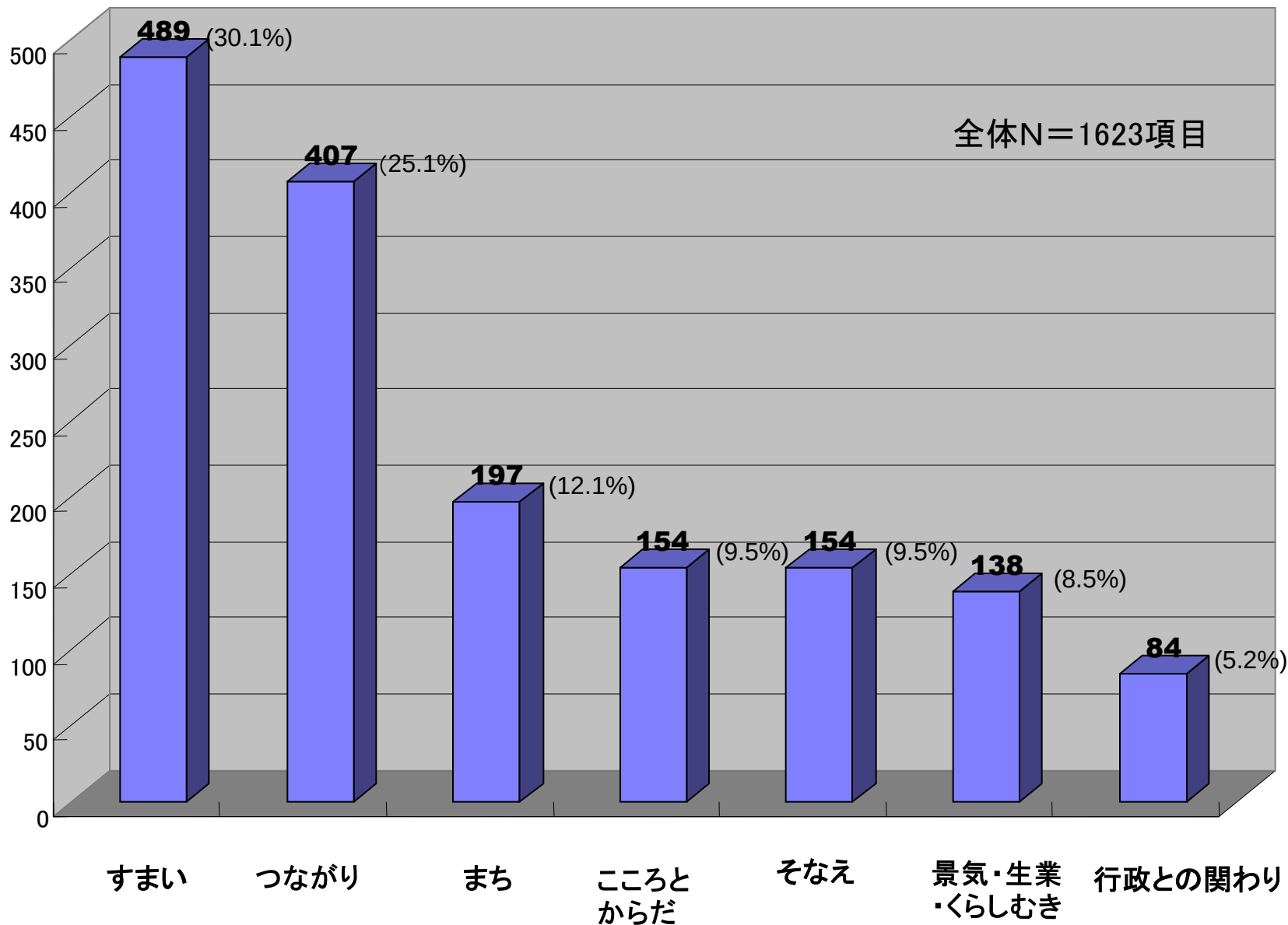
⑦行政の対応

タテ割り、融通な
さ、後見人的態度
への不満

広域避難者に情
報を、全国共通
の対応を

感謝や要望

生活再建構造の分野別カード枚数



つながりと一人ひとりの震災復興

2001年生活復興調査の結果より

つながり

地震動

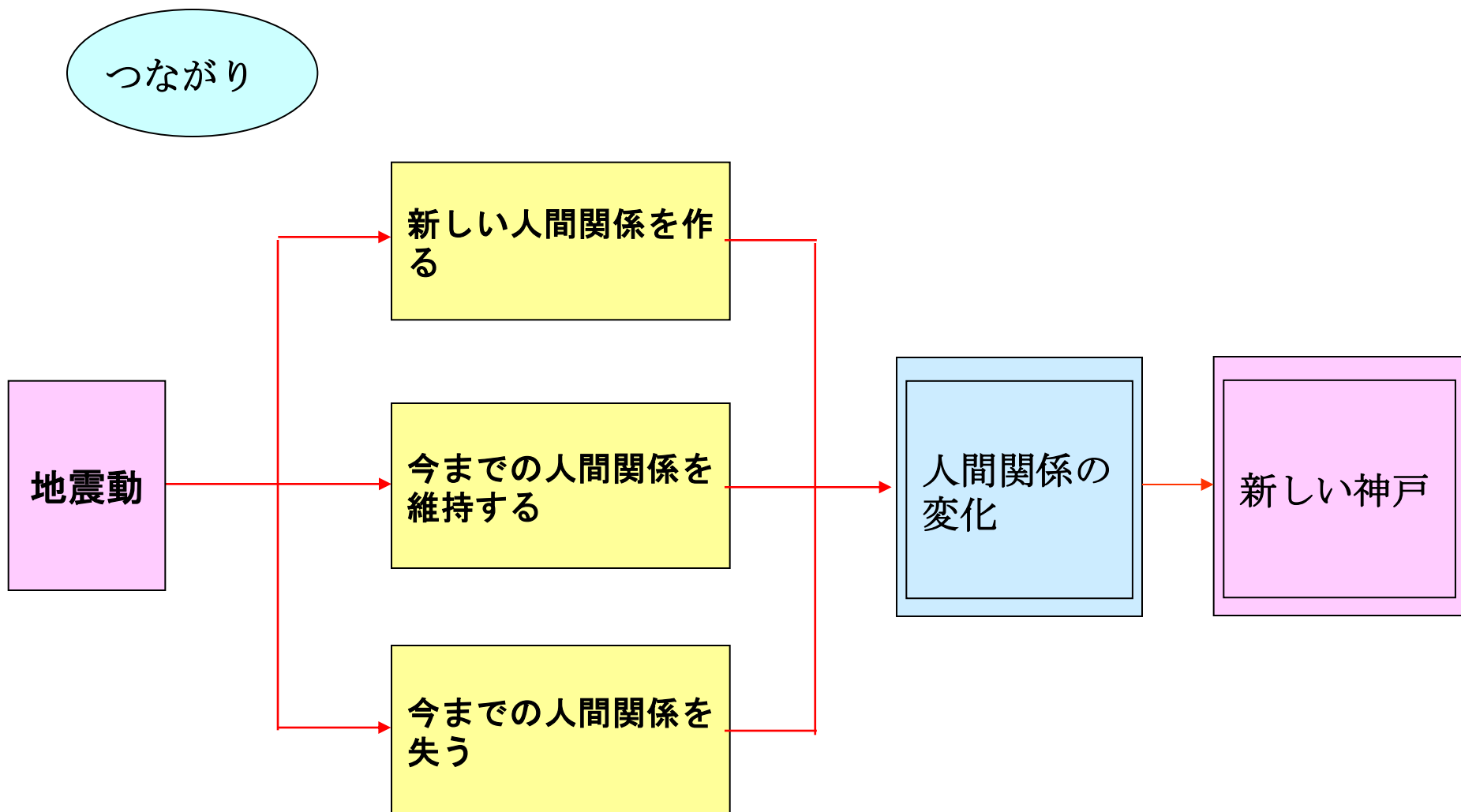
新しい人間関係を作る

今までの人間関係を
維持する

今までの人間関係を
失う

人間関係の
変化

新しい神戸



新しい神戸をつくるには

こころざしとして

一人ひとりが自律する

まず「自分から」行動する

地域での活動を始めた

ボランティアを始めた

まちづくりの主役は自分たちだという意識をもつ

市民によるまちづくりの必要性が認識され始めた

市民によるまちづくり活動が活性化した

自助を出発点とする

自治意識の大切さ

自律性の確立が大切

みんなで助け合う（連帯）

みんなが強いわけではない

弱者への配慮

「生活に余裕がなく、自分のことで精一杯」という人の存在への配慮

しかし、助け合いにも限度がある

頼れる人がいることへの感謝

「してもらえる」意識が存在する

「助けられて当然」意識が存在する

「自分だけは特別」は許されない

日々の実践として

日常的な「つながり」の場でのふるまい方を確立する

自治活動をみなおす

自治会づくりのノウハウ

「まち協」の役割・問題点とその将来

一人、少数派、多数派、組織全体のバランスをどうとるか

集会所の活用

地域活動が人のつながりをつくる

新しい居住地でのコミュニケーション不足がある

ボランティアな活動をすすめるにあたって

公衆道徳をたかめる

市民のマナーが低下した

「自分だけは例外」は許されない

2001年版市民性尺度

ひとまかせ

(兵庫県調査 震災被災者3,300名対象、
有効回答1203名 01年1月実施)

自律軽視

集団主義

連帯軽視

連帯重視

自律重視

身勝手

市民性

近所の人に自分から話しかけたりしない

困り事は誰かが解決してくれる

△ 苦労は避けて通る 幸運は続いて欲しい

困り事はその人だけの問題だ

自分で決めた事は守る

いつでも子どもに誇れる

して欲しくない事はしない

困り事はみんなで解決

◇ 苦労は役に立つ試練
○ 自分から近所の人に話しかける

幸運に酔ってはだめだ
と気をひきしめる

自分のしたいことが一番

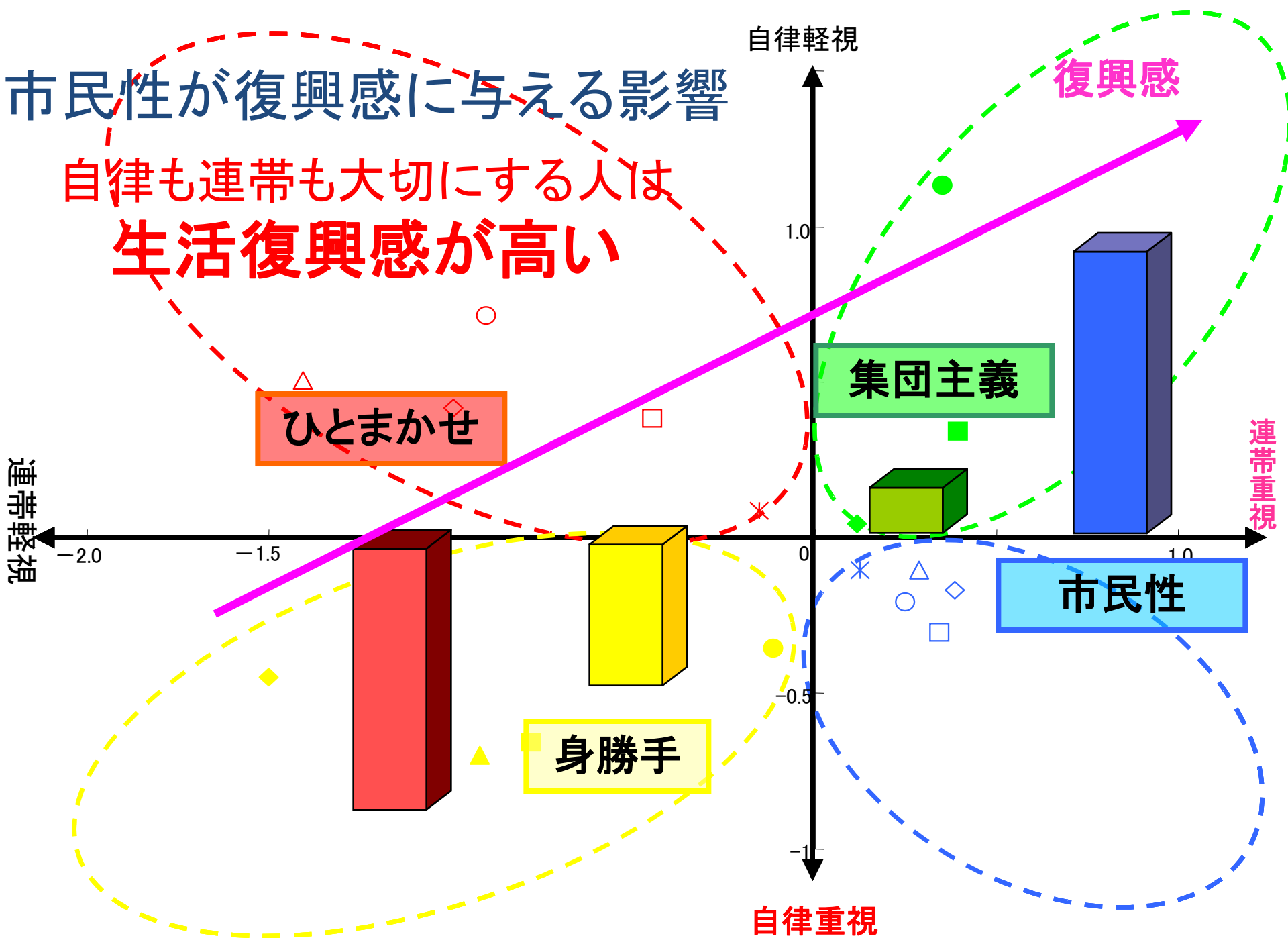
うそも方便は許される

自分の決めたことでも守らない

日頃の行いは子どもに見せたくない

市民性が復興感に与える影響

自律も連帯も大切にする人は
生活復興感が高い



人と人とのつながりのチカラ

社会調査が明らかにしたこと

社会調査から見る 被災者の生活再建過程

1999年・2001年・2003年・2005年
兵庫県復興調査

社会調査による生活再建過程のモニタリング： 1999・2001・2003・2005年兵庫県復興調査

①調査地域：神戸市全域、神戸市以外の兵庫県南部
震度7地域及び都市ガス供給停止地域

②調査対象者：上記地域在住の成人男女

③層化2段抽出法（県内250地点・県外800名）*（330地点→各地点10名）

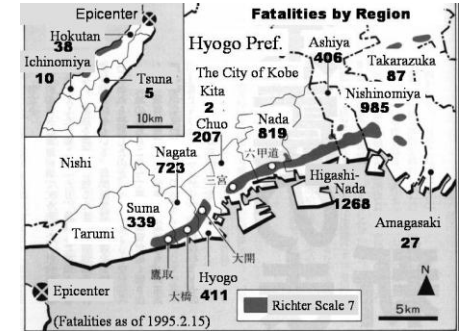
④標本抽出：住民基本台帳からの確率比率抽出

⑥調査方法：郵送自記入・郵送回収方式

⑦調査実施期間

⑧有効回答数

* 1999年調査：平成11年3月15日～3月31日	915（県内683・県外313）
2001年調査：平成13年1月15日～2月5日	1,203
2003年調査：平成15年1月15日～2月3日	1,203
2005年調査：平成16年1月15日～2月3日	1,028

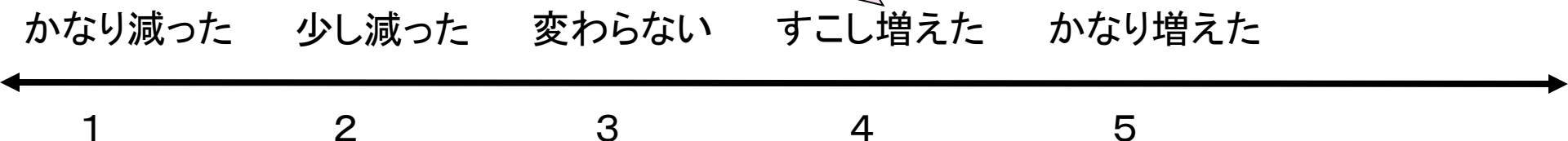


木村他(2004)「被災者の主観的時間評価からみた生活再建過程：復興カレンダーの構築」地域安全学会論文集, 6, pp. 241-250.
木村他(2006)「社会調査による生活再建過程モニタリング指標の開発：阪神・淡路大震災から10年間の復興のようす」地域安全学会論文集, 8, pp.1-10.
黒宮他(2006)「阪神淡路大震災被災者の生活復興過程に見る4つのパターン：2001年・2003年・2005年兵庫県生活復興パネル調査結果報告」
地域安全学会論文集, 8, 405-414.

生活再適応感

震災前と比べて、

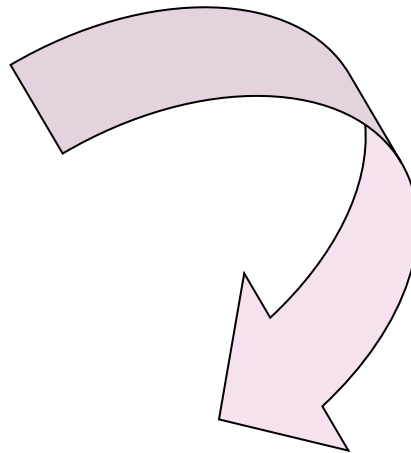
- － ① 仕事の量は、
- － ② 忙しく活動的な生活を送ることは、
- － ③ 自分のしていることに生きがいを感じることは、
- － ④ まわりの人びととうまくつきあっていくことは、
- － ⑤ 日常生活を楽しく送ることは、
- － ⑥ 自分の将来は明るいと感じることは、
- － ⑦ 元気ではつらつとしていることは
- － ⑧ 1年後は今よりも生活がよくなっていると思うことは*、



生活満足感

以下のことについて、あなたの満足度は

- ① 毎日のくらしに、
- ② ご自分の健康に、
- ③ 今の人間関係に、
- ④ 今の家計の状態に、
- ⑤ 今の家庭生活に、
- ⑥ ご自分の仕事に、



大変不満

やや不満

どちらでもない

やや満足

大変満足

1

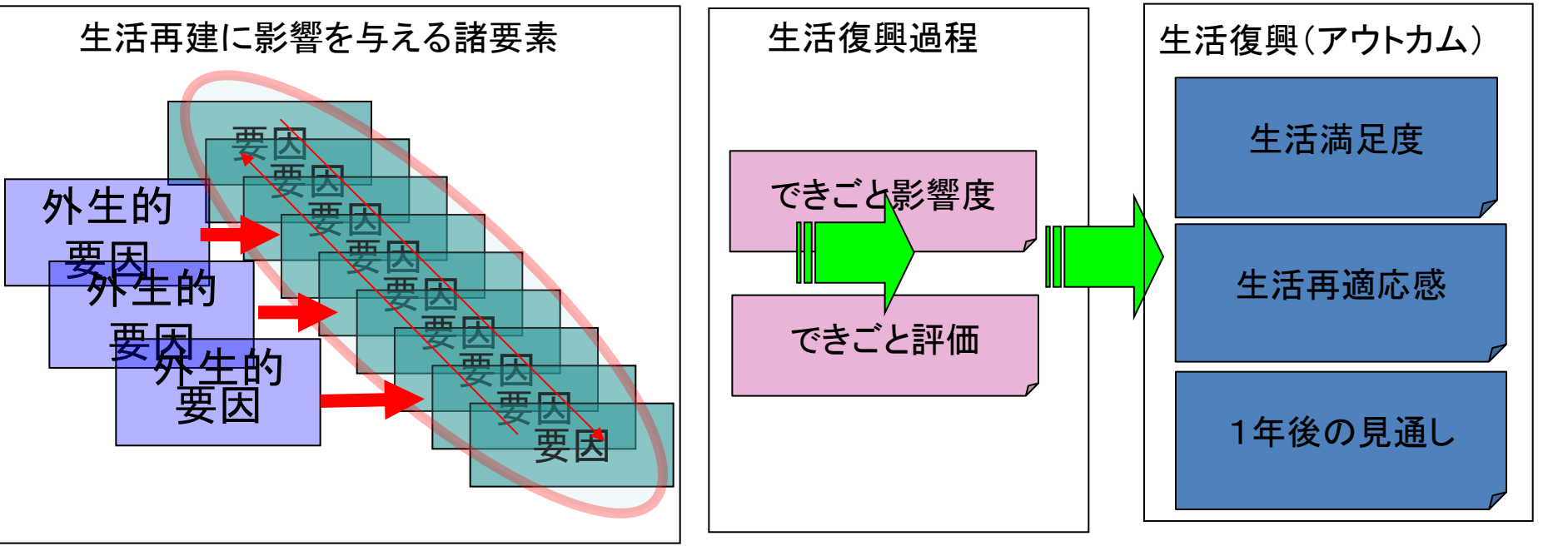
2

3

4

5

2003年1月・2005年1月兵庫県生活復興調査の調査フレーム



(2005年兵庫県復興調査 被災者3,300名対象、有効回答1028名 05年1月実施)

[illegible]

生活再建7要素モデルの検証

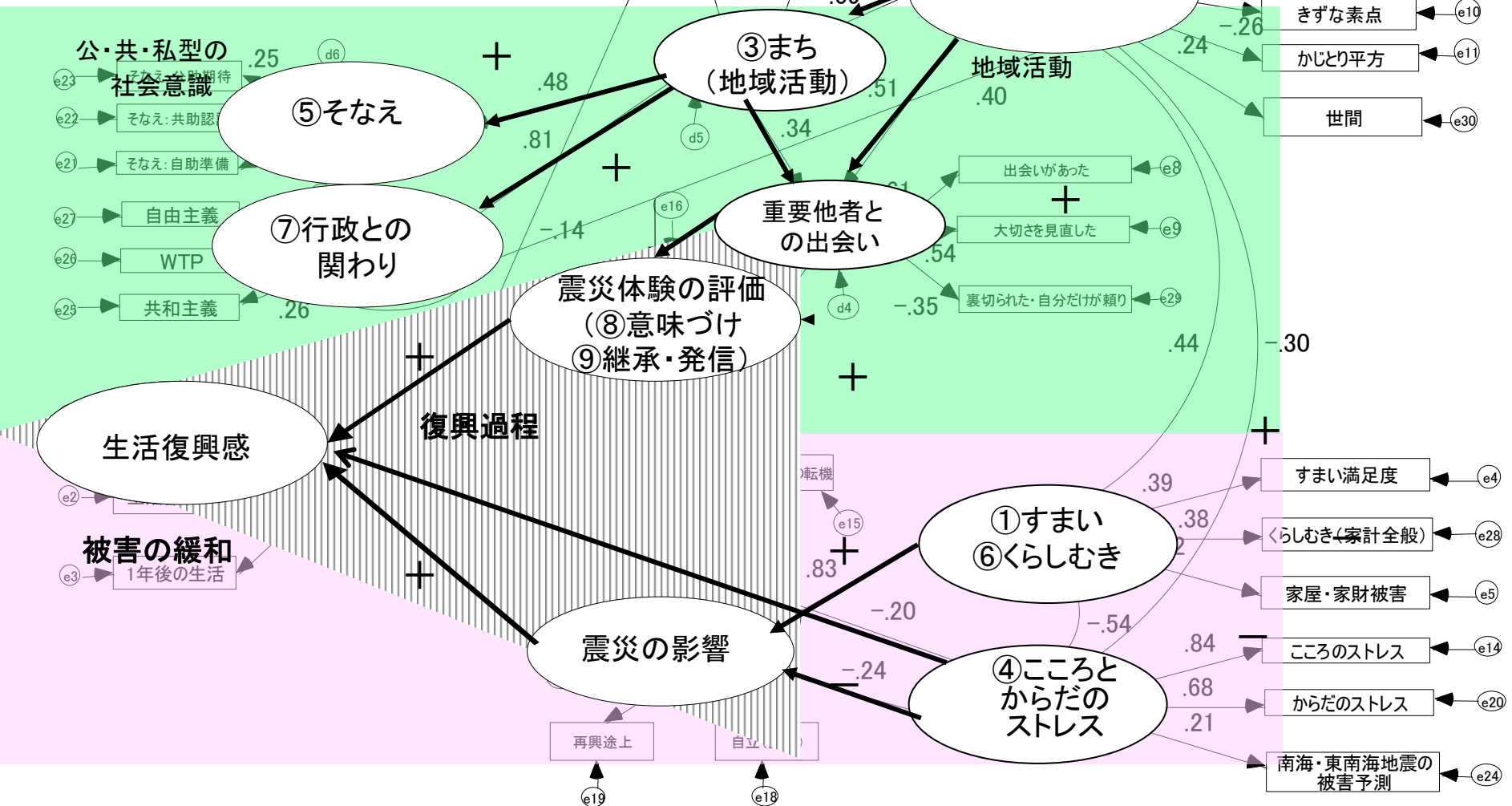
(2005年兵庫県復興調査 被災者3,300名対象、有効回答1028名 05年1月実施)

2005年_Model 37

χ^2 2乗=987.982 (df=387)

GFI=.934 AGFI=.921

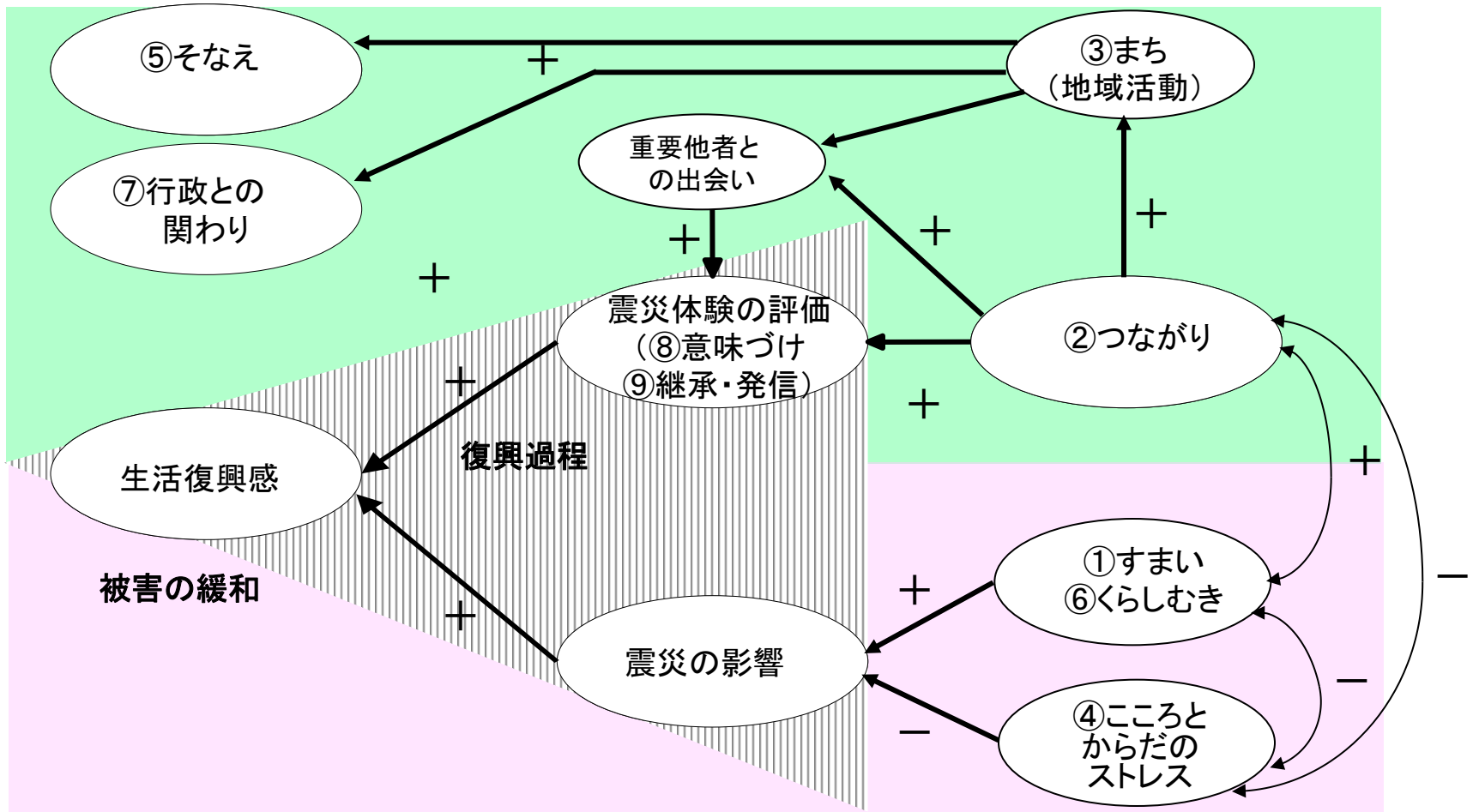
公共性の市民の参画・協働の芽生え



生活復興過程の鳥瞰図

(2005年生活復興調査結果の概要)

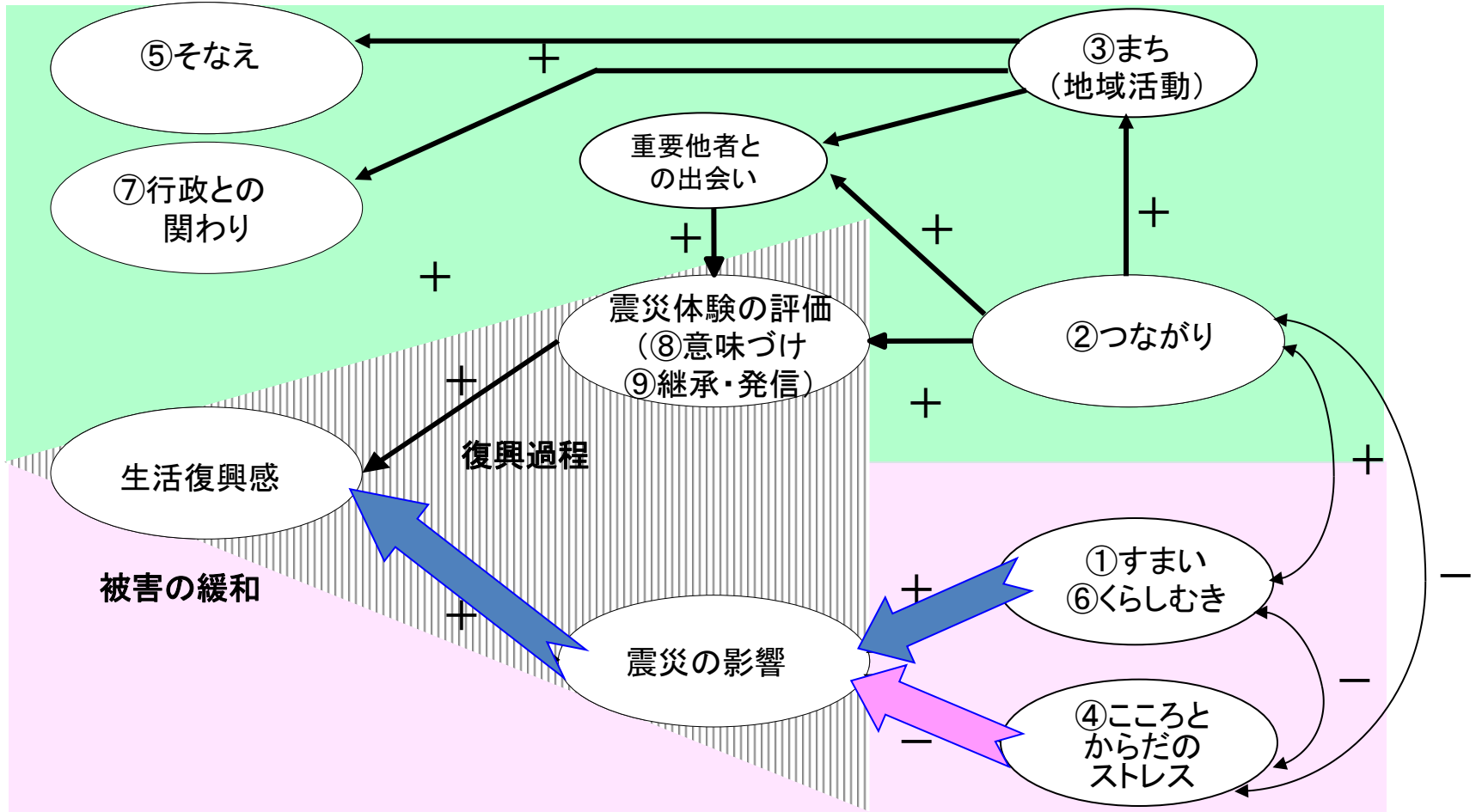
公共への市民の参画・協働の芽生え



生活復興過程の鳥瞰図

(2005年生活復興調査結果の概要)

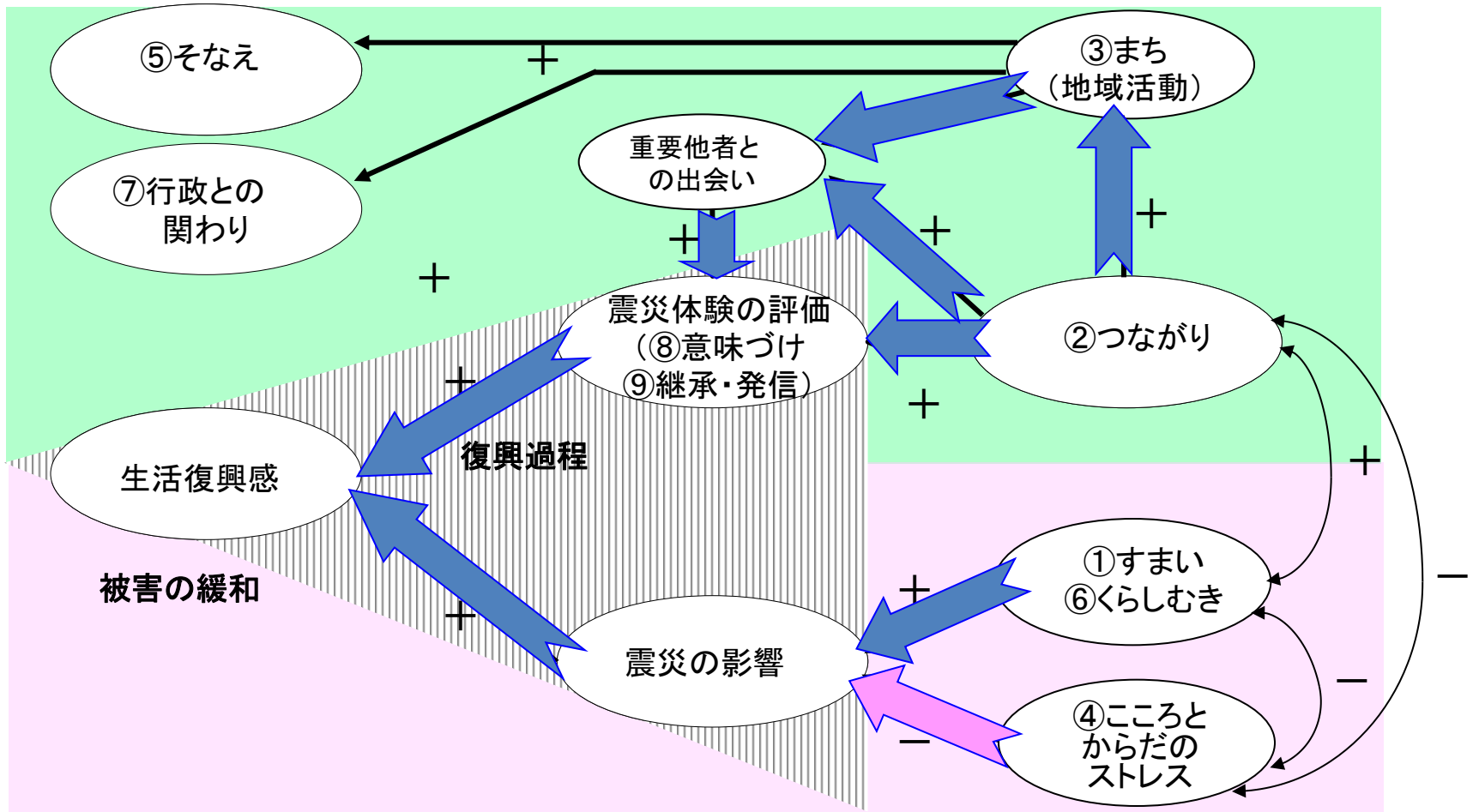
公共への市民の参画・協働の芽生え



生活復興過程の鳥瞰図

(2005年生活復興調査結果の概要)

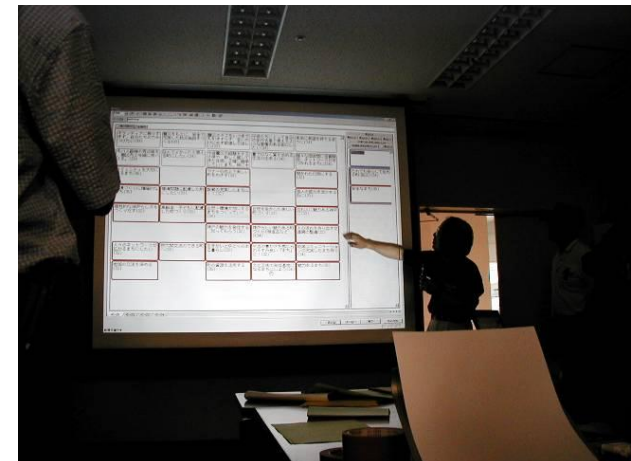
公共への市民の参画・協働の芽生え



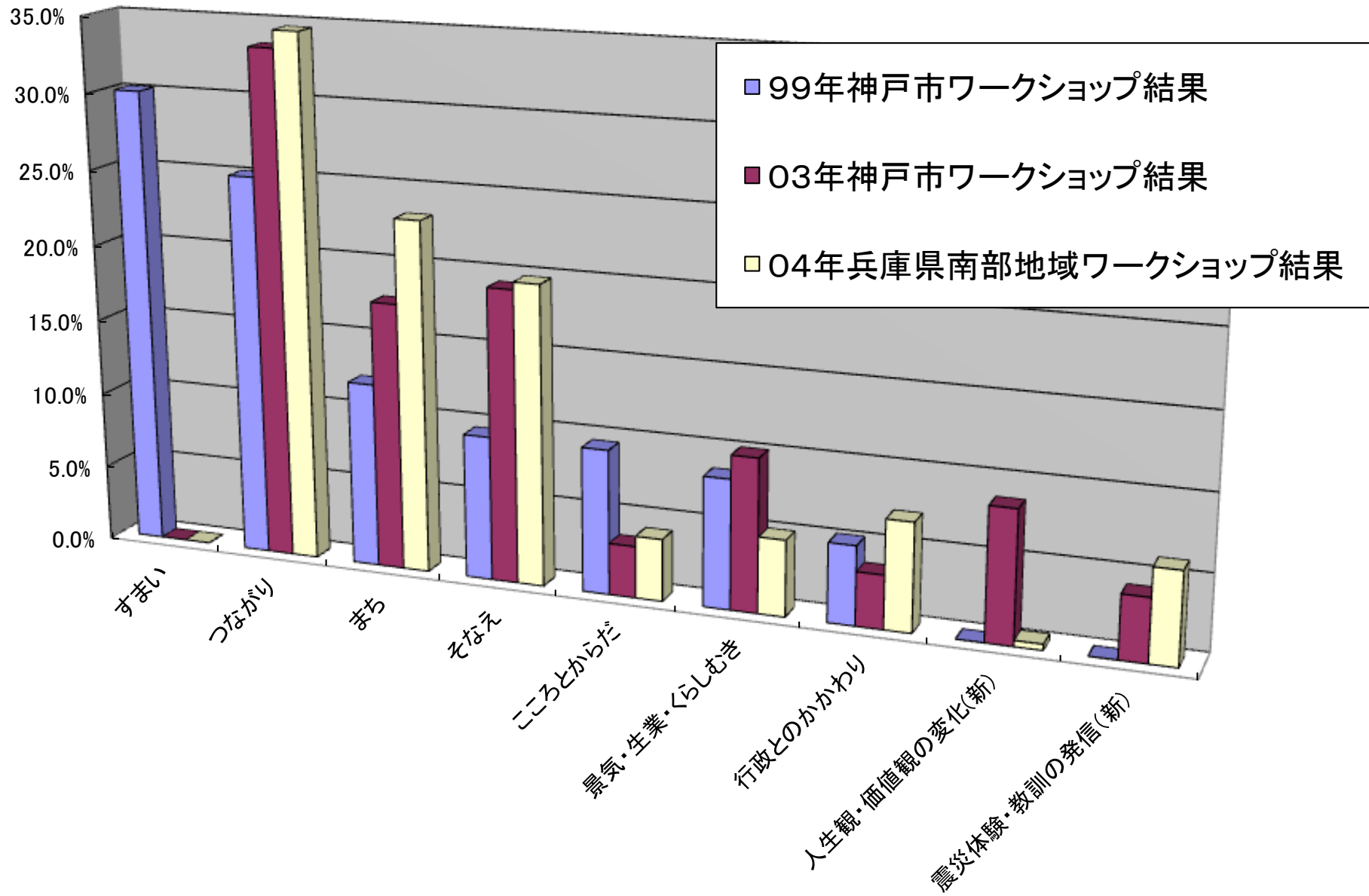


2003年神戸市・2004年兵庫県 生活再建草の根検証検討会

(神戸市・兵庫県震災10年検証)



生活再建を進める上で重要だと指摘された意見群の変化： 震災5年目検証と10年目検証ワークショップの結果から



復興 = 人生の再構築

- 被災者にとっての災害とは、突然に発生する大規模な環境の変化であり、誰ものぞまないようなつらい新しい現実を生み出すものであると定義できる。
- 被災地に住むものは、その被害の大小に関わらず、誰もが新しく生み出された現実と向かい合うことを求められた。そうした現実を受容し、新しい枠組みの中で個々の**人生を再構築**することを強いられているといえる。(中略)災害復興とは個々の被災者が新しい現実に適応した**人生の再構築**をはかることであるといえるだろう。

参考文献

- 立木茂雄(2011).「1 被災者の生活再建 1.1 概説－基本的視点」(130-131)、「1 被災者の生活再建 1.4 暮らしの再建支援方策」(140-141)、ひょうご震災記念21世紀研究機構災害対策全書編集企画委員会編『災害対策全書③復旧復興』、ぎょうせい.
- Shigeo Tatsuki (2007). Long-term life recovery processes among survivors of the 1995 Kobe earthquake: 1999, 2001, 2003, and 2005 life recovery social survey results, Journal of Disaster Research, 2, 6, 484-501.
- 立木茂雄・林春男・矢守克也・野田隆・田村圭子・木村玲欧(2004).「阪神・淡路大震災被災者の長期的な生活復興過程のモデル化とその検証:2003年兵庫県復興調査データへの構造方程式モデリング(SEM)の適用」『地域安全学会論文集』, 6, 251-260.
- 立木茂雄(2004).「神戸における「自律と連帯」の現在」『都市政策』(神戸都市問題研究所)116号,, 88-105.
- 立木茂雄(2001).TQM法による市民の生活再建の総括検証一草の根検証と生活再建の鳥瞰図づくり-『都市政策』(神戸都市問題研究所)第104号, 123-141.

(著者ホームページ: www.tatsuki.org/)